

SUMMER CONCERT



'85.7.6.(Sat.) 6:30

神戸文化ホール(大)

神戸大学交響楽団

後援 兵庫県教育委員会・兵庫県オーケストラ協議会・神戸市民文化振興財団・神戸新聞社

Program

威風堂々第4番エルガー

指揮 三田村 忠 芳

交響曲 第1番 ハ長調ベートーヴェン

指揮 堤 俊 作

—— 休 憩 ——

交響曲 第4番 ヘ短調チャイコフスキー

指揮 堤 俊 作

御 挨 拶

神戸大学経済学部教授 **新 保 博**

本日は、われわれ神戸大学交響楽団のサマー・コンサートによくおいで下さいました。皆様の暖かい御後援に支えられながら、毎年サマー・コンサートを続けてまいりましたが、年末の定期演奏会に劣らぬ成果をあげてきたと確信しております。

本年も、サマー・コンサートにふさわしいさわやかな音楽を聴いていただきたいとねがい、この四月に入学した新入生を加えて、日夜練習にはげんでまいりました。皆様に十分喜んでいただけるように仕上っていると存じます。夏の宵をごゆっくりと、エルガー、ベートーヴェン、そしてチャイコフスキーのそれぞれに華麗で爽快な調べをお楽しみください。

響友会会長 **岩 崎 純 一**

新緑が目映え爽々しい季節となりました。神戸大学交響楽団は本年の新入生を受入れて新しい編成の下に益々充実した楽団に成長していることは誠に頼もしいことであります。名誉ある永き伝統を受け継いでその上に毎年新たに発展して行くことは私にとりまして誠に嬉しいことであり、楽団の発展を心から祝福申し上げたいと思います。

今回のコンサートは新入生を含めた新メンバーによる本年最初の発表会でありますので、大いに頑張って日頃の練習の成果を充分発揮出来るよう期待いたします。

本日は多数の方々がご来場下され誠に有難うございました。厚く御礼申し上げますと共に、本夕を楽しくお過ごし下さい。



客演指揮 埴 俊 作

1947年、大阪に生まれる。幼少よりヴァイオリンを学び小杉博英、土方規久の両氏に師事。桐朋学園子供のための音楽教室、桐朋学園高校音楽科を経て、1970年桐朋学園大学音楽学部を首席で卒業。在学中はコントラバスを専攻し、赤星晃、今村清一の両氏に師事。同時に指揮を故斎藤秀雄氏に学んだ。在学中は桐朋学園オーケストラの指揮者及びソロコントラバス奏者として活躍。

1971年、東京交響楽団副指揮者に就任。同年ブッチェニのオペラ「修道女アンジェリカ」を指揮してオペラデビュー、翌72年東響の演奏会でブルックナーの第4交響曲を指揮して楽壇に正式にデビューした。

1973年、デンマーク放送管弦楽団を指揮しヨーロッパ楽壇にデビュー。1974年にはロンドンで行なわれた「第2回ルパート指揮者コンクール」で第3位となり、ロンドン交響楽団、サドラーズ・ウェルズ劇場でブッチェニ「蝶々夫人」を指揮、ロンドンの批評家、フランク・G・バーカー氏により「デイリー・エクスプレス」誌

及び「ミュージック&ミュージシャン」誌に「未来の大指揮者」と絶讃された。

1975年、東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団を創立。同年、同楽団を率いてユーゴ・スイス・フランスに演奏旅行。1978年、ジュネーヴ国際音楽コンクール指揮部門「第1回エルネスト・アンセルメ指揮者コンクール」でスイス・ロマン管弦楽団を指揮して優勝。同コンクールの審査員であったスィットナー、サヴァリッシュ、シュタイン、ブラッソン等の名指揮者たちから絶讃を浴びた。

1983年、ブルガリア文化省の招きでソフィア・フィル、プロヴディフ・フィルを指揮、東独政府芸術公団の招きでベルリン、ワイマール等6都市で演奏会を持ち、1984年にはフィンランドのトゥルク・フィル、スイスのビエンヌ交響楽団、ドレスデン国立歌劇場、ライプチヒ・ゲヴァントハウス、ウィーン楽友協会、1985年3月から4月にかけてスイス・ロマン管弦楽団、スペインのマラガ交響楽団、ブルガリア国立放送交響楽団、プロヴディフ・フィルに客演し、各地で大成功をおさめた。来シーズンには、スイス・ロマン管弦楽団、ルガーノ放送管弦楽団、ソフィア国立歌劇場管弦楽団、マラガ交響楽団、フェニックス交響楽団等への客演が予定されている。また、ブルガリア国営バルカントレコードでピアニスト、イワン・ドレンニコフとベートーヴェンのピアノ協奏曲全集のレコード録音を開始する。

こうして国際的に指揮者の活動の場を着実に拡げるかたわら日本国内でも主要オーケストラへの客演、オペラ・バレエ等幅広い活躍を続けている。とりわけオペラ分野ではスメタナ「売られた花嫁」、モーツァルト「羊飼いの王様」、ロッシーニ「アルジェリアのイタリア女」、オッフエンバック「ラ・ベリコール」、マッセ「ジャンネットの結婚」、ティリエ「宿の女将」等の日本初演を手がけ、その手腕は高い評価を得ている。

現在、東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団音楽監督・常任指揮者、桐朋学園大学講師。

学生指揮 三田村 忠 芳

彼は京都人です。そしてよくあるように非常におっとりした性格の人です。棒をふっている時は、「Vlaさん、そこちょっと悲惨ですね」とか無茶苦茶言うくせに、一旦棒を離すと、「んふんふんふ、ねむてえ。」とか、「なんで、おふとんでこんなに気持ちええんやろ。」とか訳のわからない事を言い、全く害のない顔をするので、我々は彼の指揮を「仏に金棒」と呼んでいます。さて今日のElgarは、彼が仏の顔をしてなだめたり金棒でしばいたりしながら半年かけてつくり上げたものです。演奏が終わって彼が顔をみせるとき、きつとあの「見栄晴」君の様な仏の顔をしているでしょう。

コンサートマスター 千 布 聡 子

ある日、私はいつもボーッとしている後輩からこういう質問を受けた。「千布さん、なんで今日はスカートはいているんですか？」と。私は、一瞬ドキッとしたが、「後で本人にきいとくわ」と言い、その場を逃れた。彼女の場合、女性＝スカートという公式は成り立たない。事実、演奏会のステージ以外で彼女のスカート姿にお目にかかれるのは、年に数回（片手で数えられる）ほどであり、もっぱらジーンズを愛用されている。一説には、千布さんを引用するときの三人称代名詞は「彼」という説も有力だが、私は怖いのでここでは伏せておく。

そこで、彼女の女性らしさの行方だが、それは彼女のヴァイオリンから奏でられる音にすべて託されているのだと思う。繊細で正確で美しい音。これが彼女の女性らしさのすべてと言っても過言ではない。がきつなオケの犠牲者となった千布さんにアイスクリームを買ってあげて下さい。

○なお、副指揮として磯部省吾氏、トレーナーとして延原武春、稲庭達、佐々木宏、有馬博隆、山本昭一の六人の先生方に指導して頂きました。